

「深川ひきがえるバスターズ」会員通信 特別広報版

増える！広がる！外来生物 身近な生物を知り、深川の環境を守ろう！

編集・発行：深川ひきがえるバスターズ TEL080-2869-3222（八谷）

ヒキガエル、アライグマ、セイヨウオオマルハナバチ、オオモンシロチョウ、オオハングンソウ、アメリカオニアザミなどなど、今や昔とは較べものにならないスピードで道外や海外から大量の外来生物が押し寄せる時代となりました。

これは全ての国や地域で深刻となっている生物多様性崩壊の問題です。深川にもたくさんの外来生物が侵入して定着し、元々の生態系を壊して、古き良き時代の環境がなくなりつつあります。

まずは身の回りの生活環境や自然環境を観察し、どんな外来生物がいて、どんな変化が進行しているかを知りましょう。そして、外来生物のまん延を食い止め、私たちの財産である深川の環境を守るために、今できることは何かを考えてみませんか。



撮影：松橋利光

アズマヒキガエル

本州を生息地とする大型のカエル。約30年前、神居古潭付近に定着し、深川市全域に蔓延拡大。現在は、石狩川流域全体に広がって、道の指定外来種になっている。



アライグマ

全国的・全道的に増加中の特定外来生物。深川でも急速に増加中。スイートコン、スイカ、サクランボなどの被害が深刻。法律に従った計画的な捕獲が必要。



セイヨウオオマルハナバチ

ハウス栽培トマトの花粉媒介のため輸入したが、ハウスから逃げて野外に定着。深川でもありふれたハチとなり、在来のマルハナバチたちを圧倒。野草の受粉障害なども心配される。



オオハングンソウ

1950年代に全国に定着。深川でも空地や道路縁で他の植物を押しつけて大群落を作っている。黄色い大きな花は、美しくはある。特定外来生物。



アメリカオニアザミ

1960年代に物資に混ざって北海道に侵入定着。荒地から家の庭まで広く生育。多数の種類があるアザミ類の中でもトゲが猛烈で、厚いゴム手を履いても掴めないほど鋭い。

「深川ひきがえるバスターズ」とは

環境保全ボランティア団体。外来生物に対しては、対象種と地域を絞って駆除努力を集中し、着実な成果を出していくことが大事。そこで、ヒキガエルとアライグマを対象にし、音江地区の住民が中心となって2018年に設立。現在、約40会員（個人と団体）が関係組織などと連携しながら、ヒキガエル大発生を終息させるべく奮闘中。

外来生物のなにが問題なの？ 素朴な疑問集

Q 昔から外来生物はあったはず。昔の外来種は問題にせず、今の外来種を問題にするのはなぜ？

A 昔よりずっとたくさんの外来生物が押し寄せて急速に事態は悪化しています。昔から定着している外来種より、今何とかできる外来種に努力を集中すべき。

Q 外来生物といっても、無害なものから有害なものまであるはず。外来生物が全部ダメなの？

A 本来は全部ダメですが、多くは自然に消えていっています。しかし、中には爆発的に増える種があって、特定外来生物や指定外来種に指定されています。

Q 生活や農業に損害が出てないなら、退治する意味はないのでは？

A 生態系への影響は、金額では評価できません。そもそも環境は、一番根本的な人類存在の基盤です。環境が壊れすぎると、経済活動どころか私たちの生活自体が成り立ちません。

Q ヒキガエルは日本人には馴染みのカエル。本州の一部では稀少生物になっているのに、なぜ北海道で問題なの？

A ヒキガエルは大昔から本州、四国、九州にのみ生息し、北海道の自然には無縁のカエル。在来地で絶滅するのも問題だが、新天地で爆発的に増えるのも問題。

アズマヒキガエルとは

～北海道人が持つカエルのイメージとはかけ離れたカエル～

その1

通称 ヒキガエル、別名ガマガエル。西日本にいるニホンヒキガエルも同じ種

その2

他のカエルより強めの毒を持っている（ガマの油）

その3

人の手のひらほどの大きさになる大型のカエル。体重はアマガエルの数十倍

その4

ほとんど鳴かない。ほとんどジャンプしない。あまり逃げない



ゲロゲロとは鳴かないよ！

悪者じゃないけど自分では増殖を抑えられないんだ

その7

変態後 3、4 年かかって成体になり、雌は毎年春に約 2,000 個の卵を産む。

その5

他のカエルと違って池や川にはいず、庭や草むらで生活している

その8

一年中どこかにいるが、完全な夜行性なので、昼間はまず見つからない

その6

繁殖期になると、サケのように生まれた池に戻って大集結し産卵する

そして、新天地の北海道では天敵などによる死亡が少ないため、高い繁殖力を発揮して大発生し、全道にまん延拡大中です

ヒキガエル大発生を抑えるバスターズの取り組み

A～I池ではフェンスを張り、グリーンパークの池では落水して、繁殖期に徹底した夜間の巡回捕獲を行った結果、ヒキガエル計 5,544 匹を捕獲し、その他の池やカゴ罠による捕獲を合すると、総捕獲数は 7,079 匹（6月12日現在）になりました。

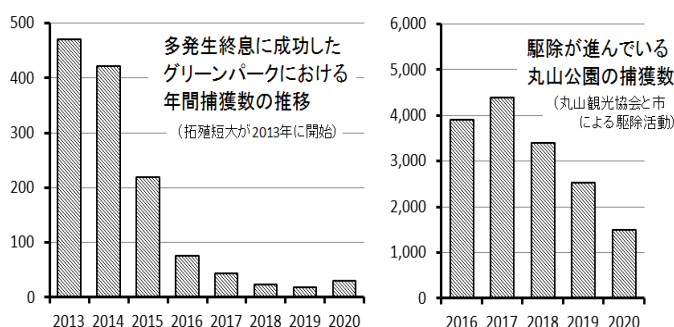
卵の除去も行った結果、重点的に取り組んだ多くの池で繁殖阻止（次世代オタマジャクシの発生ゼロ）を達成しました。

(2020年)	夜間の巡回による捕獲		カゴ罠による捕獲	次世代の発生
	延べ捕獲活動人数	捕獲総数		
音江A池	138人	811匹	48匹	なし
音江B池		687匹	17匹	なし
音江C池		534匹	8匹	なし
音江D池	151人	1,708匹	26匹	なし
音江E池		532匹	17匹	発生
音江F池		195匹	10匹	なし
向陽G池	34人	812匹	0匹	なし
国見H池	56人	234匹	0匹	なし
グリーンパーク	54人	31匹	—	なし
国見I池	45人	686匹	17匹	多発生
稲田貯水池	—	—	111匹	発生
秩父別3池	—	—	60匹	発生
音江J池	—	—	4匹	なし
豊泉K池	—	—	47匹	発生
音江L池	—	—	12匹	発生
音江M4池	—	—	268匹	なし
音江N池	10人	5匹	—	なし
音江O池	2人	29匹	—	なし
向陽P池	—	—	160匹	多発生
音江Q池	—	—	10匹	なし

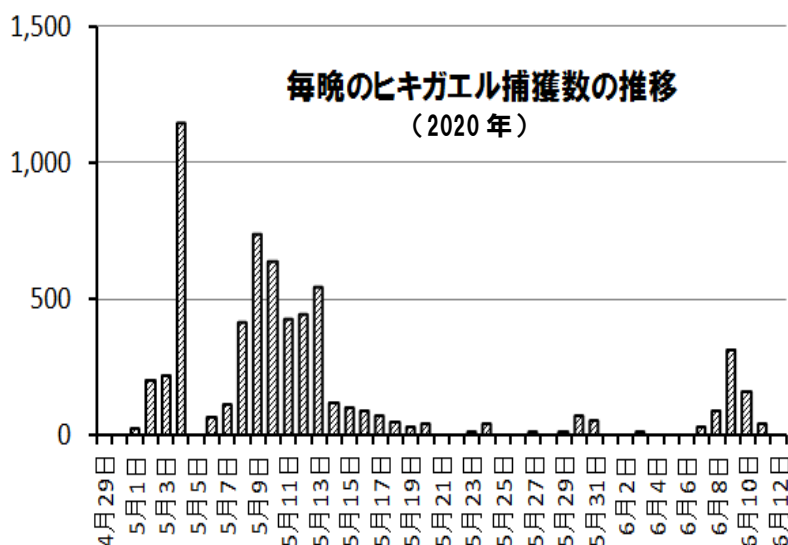
バスターズが取り組んでいる 駆除手法

1. 日没後、巡回してカエルを捕獲（これが基本的な方法）。
2. 池への侵入をフェンスで遮る。
3. カゴ罠でカエルを捕獲。
4. 卵やオタマジャクシを池から出す。
5. 池の水を抜く。池を埋める。

しかし、総捕獲数は去年(7,323 匹)よりあまり減っていません。ヒキガエルは成体になるまで3、4年かかるので、バスターズ活動4年目となる来年から本格的に減少することを期待しています。



また、4年以上駆除を続けている池では、遠く(特に上流)からカエルが来るらしく、なかなか数が減らない現象が起こっています。グリーンパークでも、周辺地区からの再侵入があって、ゼロになりません。



そこで、音江地区では、駆除地周辺にある長年放置された古い溜池に対し、持ち主と一緒に水抜き工事を行っています。

アライグマの生息と駆除の実態

～ バスターズによる捕獲と調査で、地域の全体像が見えてきた ～

アライグマとは

全国的・全道的に増え続けている侵略的な「特定外来生物」。深川市にも広く生息し、このまま増えると、スイートコンやスイカなどが作れない地域になってしまいます。



アライグマの特徴

1. どこにでも生息できる
2. 雑食性で何でも食べる
3. 前足を手のように使える
4. 成長途中の死亡が少ない
5. 一見して顔はかわいい

深川市の捕獲状況

市がとりまとめた2019年度のアライグマ捕獲数は257頭。これまで最高だった2018年度(84頭)の約3倍です。急増の主な理由として、①アライグマが増えた、②有害鳥獣処理施設ができた、③正式に捕獲する人が増えた、の3つが考えられます。

257頭のうち190頭が音江地区で、97頭が「ひきがえるバスターズ」の捕獲です。

しかし、生息頭数がどれだけ増えているのかは不明です。毎年熱心に捕獲しているはずなのに、なぜ減らないのでしょうか？

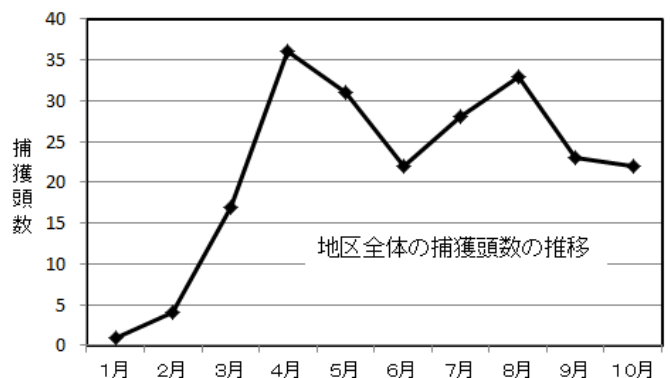
アライグマ対策の基礎知識

1. 一般的な駆除法は、箱罠による捕獲のみ。
2. 駆除を行う人は講習を受け、捕獲者登録をすることが必要。
3. 許されている殺処理法は安楽死のみ(二酸化炭素か電気)。
4. 縄張りを持たず広く行動する動物なので、自分の畑だけで捕っても、いなくなるしない。
5. 公的な駆除目標は「地域からの排除」。
6. 1年で2倍に増加できるので、地域の生息数の半分以上を毎年捕獲する必要あり。

聞き取り調査した音江地区の生息実態

箱罠(市の箱罠を含む)を持っている音江地区在住の34人に、2019年1～10月の捕獲結果を聞きました。

- ① 4月から10月まで、地区全域に20～30個の箱罠が仕掛けられ、春に最もたくさん捕獲されましたが、捕獲によって急に減ることなく秋まで捕獲が続きました。
- ② 地区全体の山麓を中心に広く捕獲されました。
- ③ 「罠掛け100日あたり捕獲頭数」は平均3.5頭。生息密度は約4.9頭/km²と推定され、道の基準では「高密度状態」に区分されます。地区全体の生息頭数は500～700頭と計算されました。



⇒ 増加を抑え、減少に転じさせるためには、現在以上の捕獲を地域全体で計画的に取り組むことが大事。多くの人のご理解とご協力を期待します。